

8. 全長型金属尿管ステントの有用性に関する検討

大津 晃, 奥木 宏延, 岡崎 浩
中村 敏之 (館林厚生病院泌尿器科)

全長型金属尿管ステント (Resonance[®] Cook Medical) が 2014 年 12 月に本邦で保険適用となった。今回、腫瘍性尿管閉塞 (Malignant ureteral obstruction: MUO) の 9 例 13 尿管に対し金属ステントを使用した。年齢は中央値で 73 (49-86) 歳、性別は男性 4 例、女性 5 例、平均観察期間 183 日、原疾患は胃癌 3 例、直腸癌 3 例 (胃直腸重複癌 1 例)、乳癌 1 例、肺癌 1 例、膵臓癌 1 例、良性リンパ節過形成 1 例、術前血清 Cr3.5 (1.48-10.27) mg/dL であった。経過中 4 例 4 尿管にステント留置後の Cr 上昇、水腎症増悪のステント不全所見を認め、追加処置を要した。1 例はステントの下方への位置異常が、他の 1 例はステント中枢側ループの付着物による閉塞がステント不全の原因と考えられた。全長型金属尿管ステントはプラスチック製ステントと比較し、管外性圧迫からの抵抗性に優れ、最大留置期間 12ヶ月と交換回数の低減も期待できるとされるが、我々の検討では早期にステント不全となる症例も少なからず存在し、その適応について慎重に検討する必要があると思われた。

臨床症例

9. スニチニブ継続困難症例に対し、ニボルマブが有効であった一例

清水 信明, 蓮見 勝, 村松 和道
青木 雅典 (群馬県立がんセンター泌尿器科)

64 歳男性、右腎細胞癌・傍大動脈リンパ節転移・下大静脈血栓、転移にて他院で右腎摘、リンパ節郭清、下大静脈血栓除去を施行。術後、肺転移に対しスニチニブを投与し、PR を得たが、ネフローゼ症候群による体重減少、疲労のため中止した。腎生検では巣状分節性糸球体硬化症と診断された。中止後、肺転移の増大を認めたため、ニボルマブを開始した。3 コース施行後、肺転移の著大な縮小を認めた。またネフローゼ症候群および全身状態の改善も認められた。TKI による尿蛋白出現および腎機能低下は日本で行われた臨床試験で海外より高率に報告されており、TKI を続ける上で悩ましい合併症の一つである。

このような症例で、ニボルマブに切り替えて有効であった症例を経験したので報告した。

〈教育講演〉

泌尿器科の最近の話題

(新専門医制度についてのアップデートを含む)

鈴木 和浩 (群馬大院・医・泌尿器科学 教授)

〈特別講演〉

座長：鈴木 和浩 (群馬大院・医・泌尿器科学)

少子高齢社会における Functional Urology

野口 満

(佐賀大学医学部泌尿器科学講座 教授)

我々泌尿器科医の守備範囲は、泌尿器科癌をはじめ腎尿路、生殖器の良性疾患と幅広く、しかも小児から高齢者まで、男女問わず診療を行います。この中で癌の根治性はもちろん臓器機能を温存し、生活の質を落とすことのない診療が現代社会では求められます。すなわち、「癌は治ったけれども失った機能も大きい」ではなく、「臓器機能低下を抑えた疾患コントロール」が望まれます。このため、“Functional Urology” という領域の学問が確立され、質の高い医療を提供するべく様々な研究が行われています。今回は、その Functional Urology を base にした診療について、二つの項目をご提示させていただき、皆様方にご意見いただければと思っております。まず一つは腎機能温存の腎癌治療についてです。糖尿病が腎癌の危険因子であることから、メタボリック症候群での腎癌発症とその外科治療において慢性腎臓病 (CKD) を考慮した治療が検討されることになります。この治療概念について基礎的研究を踏まえてご紹介させていただきます。もう一つは尿路再建術について概説させていただきます。今回は尿路再建術については、成人期への carry over を考えて小児例でお話をさせていただきます。尿路再建術においては、各症例によって術式も違うことから、患者さんと密なコミュニケーションを取り、的外れで over treatment に決してならないようにすることも肝心なことと考えています。今回、“Functional Urology” に関して二つの項目でお話をさせていただきますが、今後もこの field の発展により患者さん方により良い貢献ができればと考える次第です。